

聖書の中には主イエスが再びこの世に来られるときのこと記されております。その時主イエスはすべての生きている人も死んだ人も審かれ、主なる神にすべてを渡され、主なる神の御心のままになる国が訪れるというのです。これをよく終末論と呼んでおり、聖書の中では新約聖書の最後のヨハネの黙示録、福音書の一部から学ぶことになっております。終末論は黙示文学と呼ばれる当時大変好んで用いられておりました書き方に基づいて書かれている関係でわかりにくく、私たちもなかなか理解を深められないことが多いのですが、本日の福音書の箇所も丁度その終末の場面となっておりますので、ご一緒にそのヒントを学んでみたいと思います。

ここに出てまいりました十人のおとめのうち、五人は天国にはいる備えをしていた者たち、後の五人は備えをしていなかったため天国に入れなかったというものであります。当時のユダヤ人たちがなかなか主なる神の救いの業を受け入れようとしないため、マタイはこのように一生懸命説得をしたのです。このようにこの譬話はユダヤの状況の中で書かれ、ユダヤの人達が読むことを前提にしております。私たちはそこで時間を越えた主なる神のメッセージを聞かねばならないわけですが、それはどんなことなのでしょう。それを私たちが聞いていくのは、他の何事でもなく終末について学ぶことになるのです。

まず第一点は、「主なる神が忍耐しておられる」ということです。現在の世界は主なる神のみ心のままにはなされてはおりません。むしろ暗黒の、二千年前に主なる神が救おうとされた世界そのままであるのに気づかされます。この世を救うために主イエスを十字架にかけねばならなかったこの世界を、ノアの洪水のように滅ぼそうとされてことのあるこの世界を主なる神はどうしてそのままにしておかれるのかと言えば、主なる神は今忍耐しておられると言うことなのです。決して赦されているのではない、しかし主なる神はご自分の定めた時が来るまで忍耐を続けておられるということなのです。そして私たちが犯してしまった罪もまた、主なる神は忍耐のうちに覚えておられるのです。

第二点は、「目を覚していなさい」ということです。私たちには主なる神の定められた時がわからないのです。主イエスもまたそれは父だけが知っておられる、と言われました。もちろんこれはその時をいたずらに恐れたり、避けようとするのを勧めているわけではありません。私たちは主なる神が見ていない、

主なる神の審きは自分には及ばないと考えるとき、私たちに対する警告のメッセージなのです。主なる神は私たちを恐怖に陥れたり、何も出来ないように不自由にされるのではありません。主なる神は今もそして何時も、私たちの自由な意志に任せて正しい道を選び歩むよう望んでおられるのです。そのことを私たちがしっかり認識して信仰生活を過ごすことを教えておられるのです。

第三点は、備えをせよ、ということです。五人のおとめが天国に入れ、他の五人が入れなかったのは備えをしていなかったからでした。それでは天国にはいる備えとは何なのでしょう。善行を積むことでしょうか。なるべく多く礼拝に出席することでしょうか。そういうことではないことに気づかされます。私たち人間が主なる神につくられた被造物そのままの姿であること、ありのままの姿で生き続けることです。本年も私たちの身の回りで多くの災害が起きました。その度に私たちは人間の無力さ、人間の本当の姿を知らされます。いくら人工衛星を飛ばして台風の動きを的確に把握できるようになったとしても、その災害を防ぐことは出来ないのです。聖書の中でも災害があったことが記されています。犠牲者が出たことも記されています。その時に主イエスは、犠牲になった人達が特別に悪いことをしていたからこのようなことになったのではない。もしかしたら自分達がそのようなことになっていたかもしれないのだ。どんな小さな災害をも自分だけでは防ぐことが出来ない、そういう存在であることをよく心に留めなさい。そう教えられたのです。従って本日のこの三番目の教えは、私たちが主なる神がおつくりになった人間そのままであること、主なる神になりかわろうとしたり、この世的な欲にのみ関心が終始したり、罪を犯しても罪とは思わないそういう者ではなく、主なる神なくしては正しくは生きられない、本当に正しい道と姿を示していただき、それに従って歩むしかないと言うことを私たちがしっかり心に刻むことが教えられているのです。備えをせよ、それは私たちにとって最も簡単なしかし最も困難なことなのです。しかし主は、私たちに備えなさい、目を覚しなさい、と天国に招いておられるのです。その招きこそ、主なる神の愛にほかならないのです。主なる神が私たちが全員天国に迎え入れられることを望んでおられるのをよく覚えておきたいものです。